



『「できること探し」がくれたもの』

岡山県立倉敷中央高等学校

「あなたには自信を持ってできることがありますか？」と利用者Aさんから聞かれた。Aさんは96歳女性。要介護5。特養でこのまま看取りまで希望されている元保育士さんだ。その頃、思うように実習できない自分に落ち込んでいた私は「自信」という言葉に引っ掛かり、すぐには返事ができなかった。するとAさんは「必ずありますよ。私が見つけてみましょう。だからあなたも私のできることを見つけてみて下さいね。」と言われた。保育士さんらしい励ますような優しい口調に、「やってみようかな」という気になった。この日から私達のできること探しが始まった。

私はいつも、まず利用者さんの身体面の不自由さに目が向いてしまう。Aさんも寝たきりで全身に拘縮があり、生活全般で全介助を受けられている。しかし意識してできることを探し始めると、気づくことが沢山あった。例えば、コミュニケーションが図れること、明るい人柄、周囲の気配から職員さんや私の事を気にかけ、声をかけて下さることなどだ。

こうして少しずつ関係を深めている時だった。Aさんは蜂窩織炎で突然高熱を出された。寒気や震え、痛みもひどい様子で、口数が減り、元気もなくなっていった。そして「短歌や俳句が好きだけど、この体では何も楽しめない。私は長く生き過ぎた」と涙を流された。それまで一度も弱音をはかなかったAさんの急変ぶりに、私はショックを受けた。同時に、残りの実習期間でAさんの辛さを何とか和らげたいと思った。

その日から、私は今まで以上にAさんと過ごす時間を増やし、少しの変化にも注意した。笑顔になれるように、Aさんの好きな短歌や俳句を調べ、それについて話をしたり、短歌や俳句の番組がある日には一緒に聞いたりしながら表情を伺い、痛みや辛さを忘れられる時間を大切にした。最終日、Aさんに挨拶に行くと別れが寂しいと涙を流しながら、私に「できること」を教えて下さった。「あなたは人を大切に思い、寄り添うことができます。あなたはできることだらけです。私のできることを見つけ、支えてくれたように、これからも周りの人のできることを見つけて皆を幸せにしてあげてね。」この言葉は、私に自信を与えてくれた。私は私で良いのだと認められた気がして嬉しかった。

授業でできる活動に目を向ける大切さは学んでいたが、それは単なる知識だった。私は、Aさんとの関わりの中で、人は自分に「できること」があると気づくだけで、喜びや勇気が湧いてくることを知った。「できること」を大切な人が認めてくれることがどれほど自信になるのかを実感した。それまでの単なる知識が私の中で形となり、動き始めたのだ。

今日もAさんに挨拶ができた、私の声で目を開けて下さった、それだけで嬉しかった私にとって、「今日もそこにいて下さること」がAさんの最大のできることだ。私もAさんにとって別れるのが寂しい存在になっていた。愛の反対は無関心だと聞いたことがある。できること探しは、相手に関心を向け、存在を認める愛だと思う。私は介護する人・される人の関係を越える存在価値に気が付いた。介護は、人生すべてが影響しあい、お互いに支えあって成長できるすごい仕事だと思った。

今までの私は、嫌な所が目につくとそんな人だと決めつけ、すぐに関わりをやめてしまう所があった。しかし、Aさんと出会ったことで「その人をきちんと見よう」と思えるようになった。視点を変えてみると「その人だからこそできる良い所」が見えるかもしれない。その可能性を体験したことと、Aさんがくれた自信が、私を成長させてくれた。

私は今、日常生活でも「できること探し」をしている。それを伝えることが新たな課題だ。なぜなら、私は、利用者さんに自分のできることを実感していただくことで生きる意欲が自然にわいてくるような、そんな関わりができる介護福祉士を目指しているから。